

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月26日現在

機関番号：33913

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21610023

研究課題名（和文）地域における子どもの発達と世代間交流—後期高齢者のかつての生活様式を遊びとして—

研究課題名（英文）Child Development and Intergeneration in Community—Using the Life tools of Earlier Generation as the Play for the Early Childhood

研究代表者

金田 利子（KANEDA TOSHIKO）

名古屋芸術大学・人間発達学部・教授

研究者番号：60086006

研究成果の概要（和文）：「研究開始当初の背景(1)」に記したような状況に根ざし、本研究では、現在の子どもの2世代以上前に壮年期であった後期高齢者が「先生」になって、保育園や幼稚園で加工のプロセスを労働的遊びとして展開することによって、子どもは遊びながらもの作られるプロセスを学び、高齢者は自らの社会的役割の自覚をするのではないかという仮説を立て、実践的実験によって実証することができた。加えて、幼児は遊びのつもりが高齢者の目的に向かう行動に感化され、労働的になり、高齢者は子どもの作ることを楽しむ姿に影響され、つくるプロセスを楽しむようになるという交差的発達も観察された。その過程で子どもは始め道具に関心を寄せたが、それをうまく使いこなす高齢者を見て高齢者への関心が深まるという、高齢者の嘗ての道具と子どもの間に三項関係が成立するという関係も見いだされた。

研究成果の概要（英文）：Japanese children now are eating and using things without knowing the process of being made. To know the process of making things means that children can understand their relation with those things. So we go ahead with this execution to precede the inner hearts of children. On the other hand, old age people who know the process of making things are losing the meaning of their necessity nowadays.

Play is the center for children and they enjoy making tools for life as play. So we have been trying to exploit the old age people to show the model of hand-made life tools and to teach children how to make them.

In the process of our efforts above, both children and old age people can get the main challenge for their development by supporting of middle age people. They need one another and can get their feeling of entity. Moreover, we could know the two-way learning tendency in both children and old age people. Children enjoy the process of making life tools just for fun and then move to make better tools. Old age people aimed to make good tools for life and moved to enjoy the process of making them by watching the children's style.

We have known that children and old age people learn together, teach together, not one-way flow from old age people to children. We also have known that our cultures of human-beings are relayed spirally to the younger generation. This relation will be expanded to their living area and make it cross relation region.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,700,000	1,110,000	4,810,000

研究分野：時限

科研費の分科・細目：子ども学（子ども環境学）

キーワード：子どもの発達、世代間交流、幼児、後期高齢者、労働的遊び、子ども—道具—高齢者の三項関係、生活様式、地域

1. 研究開始当初の背景

(1) 現代の子どもたちは、科学技術の最も進んだ社会において生活している。現に食している食品についてもその加工過程についてはほとんど理解していない。プロセスを知らずに食べたり使ったりしているのである。高齢者は、かつて手作りで生活してきたので、加工の基礎過程をよく知っている。しかし、生活の方法はもはや過去に戻れない。

(2) 一方、幼稚園・保育園における高齢者と幼児と一緒にものを作ったり関係を楽しんだりする世代間交流はかなり活発になされるようになってきているが、ここで取り上げるような問題意識に貫かれた交流はなされていない。

2. 研究の目的

人間は、生活技術の到達点で日々の暮らしを営んでいる。それゆえ後行世代はものつくられるプロセスを知らずにそれを使う生活を余儀なくされている。後行世代すなわち子どもたちにどこかでそのプロセスについて学ぶ機会を保障することは、人類の文化の発展を維持していく上で不可欠な取り組みである。では、それを何処で保障するのが理にかなっているだろうか。遊ぶことが歴史的使命とさえ言える幼児時代に幼児よりも2世代ないし3世代上の今の高齢者が「先生」になり、昔取った杵柄を活かして取り組み、子どもたちにとっては「労働的遊び」として両者が交流することではないかと考えた。それによって、幼児はものつくられるプロセスを遊びを通して理解でき、高齢者は自身の社会的役割を自覚できるのではないかという仮説を立て、次のような目的で研究を行った。

壮年期には手作りが中心であった後期高齢者世代の力を引き出し、遊びが主導的活動である幼児ともの加工を中心に交流する場を実験的に組織してその効果を実証し、それによって世代間交流の発展に資する事を目的とした。

3. 研究の方法

「実践的実験」法を用いる。実践の場で行うので実践的なのであるが、実践カリキュラムにはじめから位置づいていたのではなく、仮説に基づいて条件を付与し、その効果を見るという点では実験的であるためこのように呼んだ。

ここでは、保育園の5歳児クラスと以前か

ら、行事などで幼児とかかわってきたシニアの会（約10名）の交流による実践的実験を計画した。すなわち、幼児が良く食べているにもかかわらず原料と加工方法を知らない、黄粉づくりのプロセスと、原料は、聞いて知っていても加工の工程を知らない豆腐作りのプロセスを労働的遊びとして、2～3世代前的高齢者と一緒に行くという機会を保育実践の中で実験的に組んだ。具体的には、後期高齢者の壮年期には見ることでできた、ほうろうで大豆を炒り、引き石臼で粉にすること及び、大豆から豆腐を作るプロセスを、高齢者を「先生」にして幼児としては労働的遊びとして、両者で進める実践的実験を5回に渡って行った。

効果の測定は、交流過程を毎回ビデオ撮影による記録をとり、それをもとに行った。

その際、全体の状況のみでなく、子どもについては、人や物に対する子どもたちのかわりの3タイプを代表する3人のターゲットを決めて、丁寧にビデオ記録を書き起こし、それをもとに分析した。

高齢者についても、行動の観察および発言を記録した。それらをもとに、行動・表情・驚きや理解に関する発言を整理し、子どもがどうプロセスを学んでいったか、高齢者はどのように「先生」としての役割を果たしたかを読み取った。その際、活動における物の作られるプロセス理解と充実感の測定には、基準を作って判定した。

5回の実験を終えた最後に、撮った映像を見る会を企画し、子どもにも高齢者にも、振り返ってもらう機会を設けた。子どもには子どもなりの、高齢者にも高齢者なりの方法で表現してもらい、その過程を録音し記録を作り、研究資料として分析した。家庭に戻ってどんな報告をしたかについても親から聴取した。

4. 研究成果

幼児は、もの（黄粉）の作られる過程に強い関心を示し、食べているものの作られるプロセスを印象深く理解した。体験を通して、節分の際に食べた、炒り豆と黄粉餅が味覚でつながったものと思われる。また、豆腐作りにおいては、石臼でひくことと同時にフードプロセッサーも一部取り入れたが、両者を真剣に見比べ両者が同じ働きであることにたどり着いて家で報告している子どもの姿が観察された。また、家庭への調査においても、

帰宅後、親にその感動を知らせていることが分かった。

参加した高齢者も通常は社会に役立っているという自身の社会的な価値を忘れがちであったが、自らの社会的役割について実感をもって自覚することができたと全員が報告している。この両者の関係、すなわち社会が技術的に進歩していくとき、生活技術水準の低い段階において見えていたプロセスを技術水準の高いレベルで生活している幼児に、高齢者が伝えていくという子どもと高齢者の関係は、単に今だけのことではなく、否応なく技術水準の進歩していく歴史の中で未来永劫に必要なことである。ここにこの研究の大きな意義がある。

さらにこのプロセスで次の二つのことが新たに見出された。

① 子どもははじめ高齢者によりも、手づくり時代の生活用具に強い関心をいだく。しかし次第に用具を上手に使いこなす高齢者への関心を強めていく。そこに、子ども一道具—高齢者の三項関係が成立することが確かめられた。

②はじめ幼児は遊びとしてもものづくりを行っていたが、高齢者がよいものをつくらうと目的意識をもって行っているのを見て、幼児は、段々に遊びから労働的活動に変化していき、逆に高齢者は、はじめは労働的に行っていたが幼児が楽しむのを見て、もの（黄粉や豆腐）作りを楽しむようになり、遊び的関わりに変化していった。ここに主導的活動（幼児＝遊び、高齢者＝省察労働）同士が響きあう、質の高い世代間交流の成果が確かめられた。

この研究を基本としつつ、次の3つの研究への発展方向が見いだされ、続けて次なる研究への取り組みをし始めている。

①こうした活動を地域の一人暮らしに高齢者に広げ、幼児の「先生」としての活躍の場にできないか、地域の民生委員等とともに探ること。（以下[学会発表]の2参照）

②実践的実験として行ってきたことを、保育者自身が保育のカリキュラムに取り入れていく、保育内容として展開できないか。（以下の[雑誌論文]の③参照）

③かなりの園で取り込まれるようになってきている養老統合の一つの方向として、地域の生活を踏まえた原料やかつての生活用具を使って、ここでのプログラムを更に他の園でも展開できないか。（2012年度以降の課題として計画している）

まだ、その研究は、途中であるが、そうした次なる課題に発展出来てきたこともまた、本研究の大きな成果と言える。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者に

は下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

①岡野雅子、伊藤葉子、倉持清美、金田利子中・高生の家庭科における『幼児とのふれ合い体験』を含む保育学習の効果—幼児への関心・イメージ・知識・共感的応答性の変化とその関連—日本家政学会誌、査読有、Vol.63, No.4, 2012, pp.175-184

②草野篤子、安永正史、村山陽、竹内瑠美、大場宏美、野中久美子、西真理子、藤原佳典、中学生の高齢者イメージに与える高齢者ボランティア活動の影響—SD法による測定と横断分析—、日本世代間交流学会誌、査読有、2巻、2012、pp.79-87

③金田利子、主藤久枝、草野篤子、幼児教育・保育の内容への世代間交流導入の意義と方法、日本世代間交流学会誌、査読有、2巻、2012、pp.89-95

④奈良勝行、草野篤子、3.11東日本大震災をめぐる被災校と海外との世代間交流プロジェクト—国境を越えて生徒間のきずなを求めて—、日本世代間交流学会誌、査読有、2巻、2012、pp.97-102

⑤佐々木剛、草野篤子、非家族、非親族世代間交流モデルについての検討—障がいのある子どもを持つ母親を支援する人の存在とその機能—、日本世代間交流学会誌、査読有、2巻、2012、pp.103-110

⑥Kaniz Quamrun Nahar Chhabi, Ram R. Gautam, Atsuko Kusano、バングラディッシュにおける高齢期の世代間確執—高齢者の視点から—、日本世代間交流学会誌、査読有、2巻、2012、pp.125-134

⑦金田利子、老若男女の平等社会の実現と世代間交流—カオスの状態から分類へ、そして交流へ—、日本世代間交流学会誌、査読有、1巻、2011、pp.19-26

⑧主藤久枝、金田利子、子どもの発達と世代間交流—生活用具を介した労働的遊びに見る子どもと高齢者の相互互惠性—、日本世代間交流学会誌、査読有、1巻、2011、pp.67-79

⑨安永正史、藤原佳典、村山陽、竹内瑠美、大場宏美、野中久美子、鈴木宏幸、西真理子、草野篤子、高齢者ボランティアとの交流授業が児童のソーシャルサポートに及ぼす影響、日本世代間交流学会誌、査読有、1巻、2011、pp.39-446

⑩伊藤葉子、倉持清美、岡野雅子、金田利子、家庭科の幼児とのふれ合い体験と保育施設での職場体験学習の効果の比較、日本家庭科教育学会誌、査読有、第54巻、2011、pp.31-39

⑪草野篤子、世代間交流に向けてのプレリュード—現状と今後の課題、老年社会科学、査読有、33巻、2011、pp.81-89

⑫伊藤葉子、倉持清美、岡野雅子、金田利子、中・高・大学生の幼児への共感的応答性の発

達とその影響要因、日本家政学会誌、査読有、第6巻、2010、pp.129-136

〔学会発表〕(計14件)

- ①主藤久枝、生涯発達における異世代間の関係の意義：幼児の発達と世代間交流—労働的遊びを媒介とした、実践的実験による研究—、日本発達心理学会第23回大会委員会企画シンポジウム(招待講演)、2012/3/10、名古屋国際会議場
- ②主藤久枝、金田利子、草野篤子、都市郊外に暮らす独居高齢者の社会的交流意欲の再形成に関する研究—世代間交流からの可能性の探究—、日本世代間交流学会第2回全国大会、2011/10/8 兵庫教育大学神戸サテライトキャンパス
- ③草野篤子、井上恵子、地域での世代間交流をめぐる大学の動向と課題—「遊びと学びのコラボレーションによる地域活性化システムづくり」を通して見えてきたもの—、日本世代間交流学会第2回全国大会、2011/10/8 兵庫教育大学神戸サテライトキャンパス
- ④井上恵子、草野篤子、祖父母のライフヒストリーと学生の学び、日本世代間交流学会第2回全国大会、2011/10/8 兵庫教育大学神戸サテライトキャンパス
- ⑤佐々木剛、草野篤子、障害のある子を持つ母親をささえるネットワーク、日本世代間交流学会第2回全国大会、2011/10/8 兵庫教育大学神戸サテライトキャンパス
- ⑥佐々木剛、草野篤子、身体に障害を持つ保護者の生涯受容意識に関する研究—犯行増加面接法による保護者インタビューを通して、日本家政学会第63回大会 2011/5/29、和洋女子大学
- ⑦金田利子、地域における子どもの発達・保育と世代間交流、日本保育学会第64回大会、2011/5/22、玉川大学
- ⑧金田利子、生涯発達と世代間交流—相互互恵性の指標を問う—、日本発達心理学会第22回大会、2011/3/27、東京学芸大学
- ⑨金田利子、社会的保育機関(保育所・幼稚園など)の役割—世代間交流を通して考える、財団法人母子衛生研究会主宰講演会、2010/11/5、全電通労働会館
- ⑩金田利子、乳幼児が育つための条件とは何か?—世代間交流の立場から—、日本教育心理学会第52回総会、2010/8/27、早稲田大学高田馬場キャンパス
- ⑪金田利子 Intergeneration and Development of Children、世界幼児教育・保育機構第26回大会、2010/8/9、スウェーデン・イエテボリ大学
- ⑫金田利子、乳幼児の発達と世代間交流—労働的遊びを媒介として①視点と方法—、日本保育学会第63回大会、2010/5/22、松山東雲女子大学

⑬主藤久枝、乳幼児の発達と世代間交流—労働的遊びを媒介として②具体的展開—、日本保育学会第63回大会、2010/5/22、松山東雲女子大学

⑭金田利子、生涯発達と世代間交流—世代間相互発達をとらえる指標—、日本発達心理学会第20回大会、2009/3/24、日本女子大学 目白キャンパス

〔図書〕(計3件)

- ①草野篤子、内田勇人、溝邊和成、吉津晶子、主藤久枝、金田利子、他10名、三学出版、多様化社会を紡ぐ世代間交流、2012、p.198
- ②草野篤子、金田利子、藤原佳典、間野百子、他11名、あけび書房、世代間交流学の創造—無縁社会から多世代交流型社会実現のために—、2012、p.242、
- ③草野篤子、金田利子、間野百子、柿沼幸雄、主藤久枝他13名、三学出版、世代間交流効果—人間発達と共生社会づくりの視点から—、2009、p.245、

〔産業財産権〕

○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金田 利子 (KANEDA TOSHIKO)
名古屋芸術大学・人間発達学部・教授
研究者番号：60086006

(2) 研究分担者

草野 篤子 (KUSANO ATHUKO)
白梅学園大学・子ども学部・教授
研究者番号：00180034
主藤 久枝 (SHUTO HISAE)
白梅学園短期大学・実習指導センター・助教
研究者番号：80585117
(H21：研究協力者)

(3) 連携研究者(0人)